

HopStepJump 5 児童生徒理解を深めるために①

～ユニバーサルデザインの視点に立った
授業づくりや学級づくりについて～

<https://toyono-jinjikyoo.com/>

第4回初任者研修は、これまで支援教育に深く携わってこられた豊中市立第十七中学校の矢木克典校長先生にご講義いただきました。タイトルは、「児童生徒理解を深めるために ～ユニバーサルデザインの視点に立った授業づくりや学級づくりについて～」でした。

はじめに支援教育についてこれまでの変遷等を丁寧にお話していただき、学級の気になる子どもの様子をグループで交流しました。交流では、先生方が学級の子どもたちへ思いを馳せながら伝え合う姿が印象的でした。伝える側もそれを受け止める側もとても表情が豊かで、互いに心を重ね合わせて交流していることを感じました。その後、矢木先生は子どもの気になる言動には何らかの理由があり、分析することが大切であると伝えられ、その一つの方法としてABC行動分析法を示してくださいました。そして、「授業中に関係のない発言をする」という行動に対して、グループごとに分析しました。この他にも、「ユニバーサルデザインの視点で授業づくりや学級づくりで工夫していること」を紹介し合う等、グループ交流を数多く織り交ぜながら進めてくださいました。

話し合いのルールで子どもたちが終わっていなければつい数分間、追加で取ってしまいますが、それは子どもたちに時間を守らなくても大丈夫と言ってしまっていることと同じだと知りました。ルールを明確にすることで、子どもも納得し、ぶれるのは良くないと思いました。

ABC行動分析をグループで考える中で、普段の自分の対応が子どもたちに誤学習をさせてしまっていることに気が付きました。B(行動)→C(結果)ばかりに注目してしまい、根本のA(先行条件)を考慮がおろそかになっているなどと思いました。問題行動もなるべく叱らないように心がけていますが、余裕がなくなると大きな声で叱ってしまいがちになることを反省しました。今日、矢木先生に教えていただいた①絶対にやめさせたいことは毅然とした態度で叱る。②減らしたいことは「飴と無視」③増やしたいことは行動を具体的にほめる。この3つを教室の自分の机に貼って、毎日見ながら子どもたちに接していこうと思います。

今日の講義を受けて特に印象に残ったことは子どもの理解の仕方について視覚・聴覚・運動という3つの型で考えてみるということです。漢字の指導一つとっても、それぞれの線を色で分けたり、漢字体操をしたり、電子黒板で書き順を一緒に把握したりするなどたくさんの方が考えられるということに改めて気づかされました。一つの方法にこだわらず、いろいろな方法を考えて授業に取り入れてみたり、組み合わせて使ってみたりしたいなどと思いました。

本講義を受けて、一番印象に残ったのはアセスメントの話です。問題行動に対応する際には、子どもの強みである部分を見て、支援の手立てを考えるということにはっと気づかされました。個別の指導計画などを考える時には困り感から考えることが多かったのですが、それに加え、強みを考えた方が子どもの将来に活かせる部分が見えてくると感じました。

後半の実践例はどれも参考になるものばかりでした。姿勢が悪いのは鉛筆の持ち方や物の置き方が悪いから。今日の流れは札を作って貼るとこちらの準備も楽になる。視覚と聴覚と運動で示す。ヒントカードは付箋でノートに貼るなど明日から実践できるようなものがたくさんあり、勉強になりました。

講義が進むにつれ、先生方の学びがどんどん深まっていくことを感じました。今までになかった考え方や実践例を知ったとき、“なるほど！やってみたい！”と心が動くことがあると思います。とにかく“やってみる！つくってみる！”を繰り返すことで、たとえうまくいかなくても、次のステップにつながる新たな気づきが必ずあります。

「先生どうするの？」「何するの？」という子どもたちの声がとても多い毎日で、見通しが持てるように何かできることはないかと考えていました。ユニバーサルデザインを用いて、朝来た時に一目でわかるような工夫をしてみようと思います。「後で説明するから」では、子どもたちは不安でいっぱいになるんだと反省しました。やはり子どもにとって「安心」が一番だと感じました。

実践事例をたくさん紹介していただいて、自分の学級の子どもたちの顔が思い浮かびました。「あの子にはこんな援助が使える。」「この事例を活用すればこんなこともできる。」という案が出てきて、自分の中で支援の幅が広がったのでとても良かったです。

クラスのあの子は「気になる児童」ではなく、「気にしてほしい児童」と明日から見方を変えて向き合っていきたいと思います。子どもたちの行動を良い方向に変えていくには、まず、自分が変わっていかないといけない。そんなことを改めて考えることができる研修でした。

「困った子ども」ではなく「困っている子ども」と捉え直すことは教師目線ではなく、子ども目線に立った指導が可能になると思いました。どうしても教師目線で考えてしまいがちなので、子ども目線で考えることを忘れずにいたいです。

今まで私はクラスの気になる子に対して、どんな声かけをすれば良いのか、その子の気になる行動にどんな対応をすれば良いのかばかり考えていました。しかし、今回の講義を受けて、その子の行動自体に働きかけるのではなく、周りの環境に着目して見るのが大切だと気づきました。「全ての行動には理由がある」ことを念頭に置いて、今、その子の気になる行動を引き起こしているものは何なのかを考えなければならないと感じました。行動の背景をくみ取って、自分がその子の心に寄り添いながら、その子の強みを活かして、自己肯定感を高められるような対応をめざしたいです。

支援教育という観点から子ども理解を基盤とし、授業づくりにつながる話まで広げて講義をしていただきました。できる・わかる道筋が一人ひとりちがいで、学ぶスタイルは多様であることを体験的に学びました。1学期の経験があって、子どもたちへの温かな思いがあるからこそ、矢木先生の言葉が心に響いたのだと思います。すべての子どもたちがわかる・できる授業づくりの奥深さ、子ども理解を深め続けていくことの大切さを改めて感じる研修となったのではないのでしょうか。

ユニバーサルデザインの視点に立った授業については、『大阪の授業 STANDARD』に掲載されています。

『大阪の授業 STANDARD』

5. 授業のユニバーサルデザインをめざして より抜粋

- | | |
|--------------|----------|
| ①教室・学習環境の整理 | ②授業構成の工夫 |
| ③指示・説明・発問の工夫 | ④複数教材の用意 |
| ⑤認め合う学習集団づくり | |

授業の参考になる具体的な事例も含め、詳しく掲載されています。



『大阪の授業 STANDARD』は、大阪府教育センターのWebページからダウンロードできます。